

令和4年8月29日

夏休みラジオ体操から得たもの、課題となったもの

0 はじめに

私たちの世代(私は昭和35年生まれ)では、夏休みの朝はラジオ体操をやるのが当たり前であった。学校からもらったカードにひもを通し首からぶら下げ、毎日、近くの公園に集まった。先頭に立つ高学年がうらやましくて、早く高学年になりたいと思った。雨の日以外、ハンコが並ぶ。これが、夏休みの朝の思い出である。

いつしか、朝、子どもたちがラジオ体操に集まるという習慣がなくなりつつあるのを感じた。私は長いこと教職の身にあり、子どもたちとの関係は身近であった。転勤先でも、まったくこのような活動がないところ、あっても、最初の一週間だけとか、私にとっては寂しい現実に移り変わってしまっていた。

ラジオ体操は、早起きを推奨するだけでなく、もっと奥の深いものがあると思う。「子どもたちに何とか朝のラジオ体操の習慣を身に付けさせたい。」そんな思いで、ちょっとした取り組みをしてみた。その実践報告である。

1 最初は夫婦二人から

令和3年3月31日、私は38年間勤めた教職を終え、函館市の自宅へ戻った。頭の中で「退職したらこんなことをやろう。」というのはあったが、まず、一番は、「ラジオ体操をやろう。」だった。

4月1日午前6時30分。私達夫婦二人

で、ラジオ体操を始めた。二週間ぐらい過ぎて、「毎朝、公園で何かをやっている。」とい噂を嗅ぎつけた人が、仲間に加わった。三人、四人……。それじゃあということで、チラシを作って、望洋団地の各家庭にPRをした。5月からはぐっと人も増えた。以後、増えたり、減ったり、たまに来る人もいたりして、ラジオ体操は、続いた。その中には、いわゆる「レギュラーさん」も生まれ、11月末日まで、続き、4月の再開を約束した。

3月末に、もう一度全世帯にチラシを配り、去年のレギュラーさんに加えて、何人かが集まった。昨年よりは、少し増えた感じ。それでも10名ちょっとぐらいの集団であった。そして、7月を迎えた。

2 子どもたちに呼びかけたい

この夏が子どもたちへの仕掛け時。でも、子どもたちを呼ぶとなると、考えなければならないことがある。ひとつの事をやろうとすると、いろんなことを考えてしまう。今回の夏に向けてのラジオ体操のチラシを配ろうとしたこともそうだ。

一個人がこのような行動をとると、「あんた、何様?」「体操を強制するの?」「勧誘のチラシは迷惑だ。」「今、子どもが早起きしてラジオ体操をする時代じゃないでしょ。」「途中で、何かあったら、あなた、どうやって責任を取るの?」等という声もどこかで必ず起きることはわかっている。でも、その一方、「がんばっている人もい

るんだな。」と応援してくれる人もいます。よし、もしかしたら、「うちの子、夏休みは体操させようかしら。」と考えて下さる保護者もいるかもしれない。

今、大人が地域の子どもたちに声をかけてあげづらい状況が確かにある。多くの大人は「子どもたちから不審者扱いされる。」みたいなことを考えてしまうようだ。でも、私は、それは違うと言い切れる。子どもたちに大人の方から声をかけるのを躊躇しているだけだと思う。ここ何か月か、夕暮れ時に必ず、公園に顔を出すようにしている。十字架通せんを教えることもある。逆上がりができるようになった子もいる。ブランコを「こいで、こいで。」という子もいる。私が白い袋をぶら下げて行っただけで、ゴミ拾いをしてくれる子もいる。私からも、子どもたちに会うと必ずひと声かけるが、子どもたちからも挨拶をしてくれる。大人から声をかけると、子どもたちに心を開いていくと、子どもは素直に、答えてくれる。自分が毎日そうやって子どもたちと接しているのですから間違いないことである。

チラシにも「地域で子どもたちを育てましょう。」書いたが、地域の人とふれあうことで子どもたちは変わる。地域の人を大切に作る気持ちが育つと考える。

地域の人材を育てることも、もっと広く言えば、次の世代の日本人を育てることも、さらに広げるならば、戦争を憎み、平和を愛する人間を育てることが、今、大人として力を入れていかなければならないことであると思う。子どもに対して、無関心、親任せ、学校任せであってはいけないと思う。そうするとその子も、周り

に無関心、人任せの人になってしまう。「地域で子どもを育てる。」地域住民が今、とても大切に考えなければならないこと。私は、このことに尽きると思う。

という考えを持ちながら、A 団地、B 団地、そしてその間にある旧望洋にもチラシを入れた。

3 夏休み初日 7月25日

私は、朝早くから目が覚め、ドキドキ状態。前日から、ずっと不安だった。前日で学校が終わり。その日から夏休み。「ラジオ体操やりましょう。」のチラシは週末までに、望洋団地全てと旧望洋に配布しました。子どもたちが来るか、来ないか。そんな不安な気持ちを抱きながら、前日、体操カード(ハンコを押すカードです)を印刷した。

今朝の天候は晴れ。私の心の天気は霧の中。6時20分過ぎにラジオを持って外に出ました。子どもたちがもう、ブランコに乗って遊んでいた。心の霧が一気に吹き飛んだ。子どもたちが10人以上、そしてその保護者も何組か、そしていつものレギュラーの皆さん。軽く20名は超える大ラジオ体操会になった。子どもたちに前日に印刷したカードを配りました。20枚ほどプリントアウトしてして、残部は5枚だった。ぎりぎりセーフ。

初日、大、大成功。子どもたちを前の方に2列に並べて、ラジオ体操をした。終わったら、私が子どもの頃そうだったように、ハンコを押して、「じゃあまた明日。」レギュラーの皆さんもとってもにっこりでした。

ラジオ体操に出てこようと思った子ども

たちの気持ち、「行ってらっしゃい。」と送り出して下った保護者のみなさんに感謝でいっぱいである。

長いこと人生をやっている、心底喜びをかみしめることができる日はそう多くない。でも、私はこんなうれしい日を迎えることができた。幸せ者だと思う。

3 日目の壁を破れるか、ちょっと不安もないわけではないが、とつても素敵な一日のスタートだった。

4 だんだん人数は減っていったけれど、まあいいでしょう。

最初の一週間ぐらいは新規のカードも配りつつ、大盛況だった。でも次第に人数は減っていった。やはり続けることは並大抵のことではない。来たり、来なかったりする子もいる。それぞれの考え方であるし、それはいたしかたない。初日にラジ体操に出ただけでもとてもほめてあげたい。こうして最終的にはレギュラーは数名になった。

5 子どもたちに伝えたい日

子どもたちに、日本人として生きていく上で、絶対に伝えなくてはならない日がある。それは8月6日、9日、15日である。広島、長崎の原子力爆弾、そして、終戦記念日である。広島、長崎では多くの方が亡くなった。そして、日本は終戦を迎えた。多くの犠牲を払って。そのことと同時に、ただ、日本人がかわいそうだけではなく、そもそもの原因が日本の侵略にあったことも伝えた。

子どもたちには、こういう戦争が77年前に起こっていた事実が有ること、多くの人

亡くなっていること、そして、武力を使うことはいけないことを教えた。と同時に、物事に無関心であってはいけないこと、自分の親、兄弟、友達、地域の人たちに優しい心を持つように話した。

そして、みんな優しい心は持っていると思う。でも心は見えない。心は見えないけれども、心遣いは見える。何かその優しい心を言葉で、行動で示していくと、自分の成長にもつながるし、他の人も幸せにできる、というような話をした。

過去を学ぶ、日本の過ちを学ぶ。過去を学ぶことによって、未来の方向性が見えて来る。私達は、その未来を子どもたちに託すしかない。その使命を今果たしていかなければならないと私は思う。

6 夏休み最終日が近づいて

人数が減ってきた中で最後をどう締めくくるか。私はお菓子をあげるなどということは考えなかった。子どもはお菓子の方がいいだろうし、大人としてもその方が、楽である。でも、私は楽をしない方法を選んだ。お金で買えないものをプレゼントしたかった。昨年の大人とほぼ同じ考えで、プラバンに油性マジック、トースターという定番ではあるがメダルをプレゼントすることにしたすぐにどこかへ行ってしまふかもしれないし、何十年もずっとずっと大切にしてもらえるかもしれない。

メダルには思い出がある。もう30年以上前の静内でのことだったと思うが。運動会があつて、その前の日に子どもたちに1年生の子どもたちにペンダントみたくして、「運動会力の全てをだしましよう。担任佐々木朗」みたいのを作ってあげた。

運動会の日、みんな、Tシャツの下にメダルを忍ばせて、ちょっと「私たち、今日秘密のお守りがあるの。」みたいな表情を見せながら、登校してきて、教室の隅っこで見せあっこしていた。勝敗はともかく、心は見事に一つになりました。子どもたちを見ていてそのことがよくわかった。そんな思い出があるもので、時たま、思い出をなぞるような形で、このメダル作りを実践している。

時代はその頃と変わったのかもしれないが、心を込めて作った参加賞、大切にしてくれるといいなあと思った。

事前にアンケートを朝に配布して、感想を書いてもらい、その名前でメダルの準備に取り掛かった。

7 8月24日

その日のラジオ体操では、最後の私の話として「続ける」ことの大切さを説いた。「みなさんは、夏休みの間ラジオ体操を続け、この日を迎えました。一日二日参加するのも立派だと思いますが、ずっと続けることは、とても難しいことです。ラジオ体操だけではありません。勉強も、習い事も自分の趣味も続けることで力がついてきます。ラジオ体操を続けることができた力は、学校生活や普段の生活の中でも必ず生きてくる場面があります。明日から第2学期。一日一日を大切に充実した学校生活を送って下さい。」子どもたちはメダルを手に、「ありがとう」の言葉とともに公園を去って行った。一つの事を終えた充実感と、また、一抹の寂しさもあった。

8 8月25日

いつもの時間にいつものように、いつものメンバーが集まった。「なんか子どもがいないと寂しいね。」みな同じことを言っている。確かにその通り。でもこれが日常である。日常があるからこそ、何かあった時が心ウキウキするのである。まだ、11月末までは長い。たまに子どもたち来てくればいいなあと思いながら、また、日常の体操がこれからも続いていく。

9 子どもたちの感想から

アンケート用紙には、何人かの子どもが感想を書いてくれた。

「あんまりひとがいない日でも、ずっとずっと毎日、ラジオ体操をやってくれて、ありがとうございます。そしてラジオ体操第二はまだおぼえられなかったのですが、やってくれて、ありがとうございます。ご苦労様でした。」

「ラジオ体操のおかげでマインチ早おきができました。あと目ざめもすっきりでした。朝から体操して気持ちよかったです。」

「このラジオ体操に参加すると、毎朝目が覚めてラジオ体操が楽しいと思います。わからなかったラジオ体操第二もしっかり覚えました。これから雨の日も、しっかりと、復習したいです。」

保護者の言葉

「ここ数年、コロナ禍で、季節の行事を子どもに体験させられない中、夏休みの行事の一つラジオ体操をやっていただき、とてもありがたいことだと感謝しています。行動範囲の狭い息子も公園までの道のりを覚えました。来年もよろしくお願

いします。

10 最後に

「自分が教員に向いていない。」と退職するまで思い続けていたのであるが、今こうして、子どもを育てることに力を入れている自分を見て、なんかちょっとおかしいというか歯がゆい気持ちになる。もしか

して、ちょっとは「教員に向いてたのではないのかな。」とここ最近になって思うようになった。

まあ、これからもあまり先生ずらししないで、近所のおじさんとして、子どもたちに声をかけ、地域を愛する子どもたちを育てることにちょっとでも力を出せたらと思う。